〔個別研究〕

思春期女性の身体にはたらきかける行為の意味についての一考察
1 抜毛癖の自傷的行為の意味について

母子保健研究部　　千 賀 悠 子

要約： 最近、思春期の女性における摂食障害、wrist cut、薬物依存あるいは反社会的行為等、身体に自傷的行為を与えることが増えてきていると言われている。自傷的行為とも考えられる抜毛癖は、前思春期の女性に比較的多く見られると言われ、抜毛癖の心理社会的要因としては、家族的問題が最も重要視されてきた。特に母親の養育態度には支配的・過干渉な傾向があると指摘され、娘には権威的な母親からの分離不安と攻撃的あるいは敵対的な感情という両価的感情が存在していると言われてきた。また、自らの身体に何故に自傷的行為を行うのかということに関しては、身体が自己から疎外され、自己の一部が外部化（非自己化）されているからで、それ故に身体感覚等も疎外されているので痛み等が感じにくいのではないかとも言われている。そこで、思春期女性における抜毛癖の自傷的行為の意味について検討し、自傷的行為には身体に風穴を開け自己変容を求める意味があると考えた。すなわち、①否定的母性に対する怒りなどの攻撃性の転換、②性同一性（受容）の葛藤、③親密性等のふれあいを求める風穴あけ、④自己変容を求める風穴あけ、⑤自己の存在性＜精神性－魂＞に開かれていく風穴あけである。

見出し語：抜毛癖、自傷的行為、自己疎外、風穴あけ

Evaluation of Adolescent Female Individuals' Physiological Self-Damaging Behavior: Psychological Meanings of Trichotillomanias's Self-Damaging Behavior

Yuko Chiga

(Abstract)
A number of adolescent individuals' self-damaging behaviors such as eating disorder, suicidal attempt(s), drug dependency, and/or antisocial behavior have dramatically increased. When self-damaging behavior is psychologically analyzed, the self appears to be alienated, and the portion of the self is externalized and/or separeted from the core self, which could cause the lack of sensation, especially painful experiences. Any individuals who present with choronic Trichotillomania in adulthood have reported onset in early childhood, and the age at onset is usually before young adulthood. Psychologically understanding of physiological self-damaging behavior in an early adolescent individuals is important, especially this problem is pointed out to last longer in their lives. Particularly, familial problems in Trichotillomania indicates the most damaging factor. When the mothering attitude toward her own daughter is dominant and interferential during the youngner childhood and puberty, daughters experience ambivalent feelings between fear of separetion and hostile feeling toward their mothers. This article focused on the relationship between these ambivalent feelings and physiologiacal self-damaging behavior in adolescent female individuals.
The following five factors could explain possible explanations of above issues:
① transferring feelings of anger and denial toward a mother to an adolescent individual's own body, ② having difficulties in accepting an adolescent individual's own sexuality, ③ disappointing from undeveloped intimate relationships with others, ④ processing her own individuation, and ⑤ experiencing the feeling of her own existence.

Key words: Trichotillomania, Self-Damaging Behavior, Self-alienation, Venting

I　はじめに

われわれは、病気や怪我等による苦痛の時に身体が意識されることが多い。だが、喜び悲しみ等の様々な気持ちや感情を身体の様々な部位で無意識的に表現していることが多いのではないだろうか。

例えば、「頭」は＜頭にくる、頭が上がらない、頭ごなし、頭でっかち＞等と、知や人間関係等や社会的関係を表現するものとして、また、その人間関係において生じる感情等を象徴的に表しているといえよう。「胸」は＜胸がすく、胸がつぶれる、胸を躍らせる、胸を焦がす、胸をなで下ろす、胸三寸に納める＞等と、「胸」は頭に一撃食らったことを納めたり、気持ちや感情を秘やかに納める所として象徴的に用いられている。身体を象徴的に表現する言葉については列挙にいとまがないが、「目は口ほどにものを言う」という喩えのように、non-verbal communicationという身体言語でわれわれはcommunicationを行っていることが多い。また、心の問題を身体で語らせることがしばしばあるのではないだろうか。

心身症のように身体の病あるいは違和感を訴えるその背後には、心の問題や心配事等がある。心の問題が身体の内部から外部にと病気等によって表現されてくる。摂食障害やアルコール中毒や薬物依存、そしてリストカット等の自傷的行為と考えられる症状は、身体の外部から内部へと身体を傷つけたり負荷を与えるのだが、この行為の背景にも心の問題があると考えられている。このように心の問題等がある場合に、身体内部からの症状ではなく何故に身体の外部からのはたらきかけになるのであろうか。

離人感のある人は、自分の身体の存在が感じにくいと言う。リストカットを行った人や拒食症の人は、身体を標的に命がけで身体に関わることを行う。だが、この様な症状あるいは行為を行う人達は、痛みや苦痛や不快感等の感覚をほとんど感じないと言う。この様に感覚が麻痺しているというか鈍化しているのは、痛みや苦痛等の感覚を身体内部から声として発することができにくく、身体が存在としての自己から疎外されている状況にあるといえないだろうか。このように身体あるいは精神が自己から疎外されている場合、その疎外状態を調整し統合をはかるべく、どのようなことがどのように行われるのであろうか。

河合は[1]心身症の人の箱庭に表現される世界から次のように述べている。箱庭は三つの領域が作られ、二つは身体と精神の領域の特徴をもっているが、この二つの領域は隔絶されて表現される場合が多い。この様な二つの世界が統合された未来の姿が、第三の領域として表されるのではないかと。筆者の経験では、第三の領域が統合される世界として表現される場合もあるが、この統合された世界に至るまでの過程における＜知恵や助力＞の存在として第三の領域が描かれる場合もある。

自己から身体が疎外されている場合、その疎外されている状況に対して風穴をあけるように自己の身体に自傷的ともいえる行為をもって関わるのではないだろうか。そして、その行為は、内在している＜知恵や助力＞の活性化を無意識的に促し、疎外あるいは分裂状態の自己の統合をはかる為の試みの一つではないかと考える。自傷的行為は、河合の言う第三の領域への過程の第一歩なのではないだろうか。

本論では、身体の外部から内部に傷をつけたり負荷を与える自傷的行為における＜自らが身体にはたらきかける行為の意味＞について考察する。

II　＜身体に＞という意味について

身体＜を＞という表現ではなくして、身体＜に＞という表現を採るのは次のように考えられるからである。＜を＞という助詞は、動作や作用の対象を示す助詞で、五感を表す場合には＜音を聴く、絵を見る、匂いをかぐ、食べ物を味わう＞というように、多くの場合は自己とは異なるものを身体で受け止める時に使われる。坂部は[2]、主体と客体の別がはっきりしていると述べている。触覚を表す場合は、＜肌に触れる、肌に触る＞等というよ

うに、<に>という助詞で表現されることが多い。<に>という助詞は、<家にいます、東京に行く、人に会う、信号が青になる>等、場所や方角や相手方を表し、または変化の結果を表す意味もある。坂部は、主体と客体が明確に分離されていない状態を示していると言う。家にいるという場合、<に>は所を表す助詞であるが、庭や家具も雰囲気も含めた家の中に人間が存在しており、人は家の中に取り込まれ主体と客体のはっきりとしない状態を指すのであろう。坂部は<に>という助詞は、相互嵌入、転移、交叉、ふれあい等、力動的な事態があり、<分ける>という意味を持たせることが難しいと述べている。自己の身体にはたらきかける自傷的行為には、疎外されているものの統合あるいは変容という意味があると考え、融合状態からの変化・変容の意味を持つ<に>という助詞を使用する。

Ⅲ 抜毛癖< trichotillomania >について

身体に働きかける意識的あるいは無意識的な自傷的行為は、いろいろの症状や癖となって表れる。本論では、前思春女性に見られる抜毛癖を取り上げ、様々の症状や癖のうち自己の身体にはたらきかける行為の意味について考える。

1 抜毛癖とは

抜毛癖は精神医学事典によると[3]、「身体の毛、ことに頭髪を引き抜く症状で女子により多く見られる。コントロールできない怒りを抜毛によって何とか解消しようとするものであると理解されているが、特に抜毛という形をとるのかが問題である。E.Buxbaum. によると<一種の性的倒錯である>という。性器期より前におこる去勢不安にもとづくとされる。P.Greenacre は<エディプス前期における強い外傷体験（手術、出産、事故などの出血を伴う経験）からこのような性的倒錯は芽生える>という。いずれにしても幼児期の対象関係が上手く行かなかったケースに見られることが多いと言われている。また、抜毛は去勢不安の否定のために用いられる一方で、自慰行為の代償としてあるいは自慰の気持ちへの防衛として抜毛が行われるのではないかという考えもある。」とされている。

DSM－Ⅳ[4]では、抜毛癖は他のどこにも分類されない衝動制御の障害の中に入っている。

診断的特徴－繰り返し体毛を抜き、その結果、体毛の喪失が目立つようになる事である。抜毛の箇所は、体毛の生えうるからだのどのような部分も含むが、最も多い部分は頭皮、まゆげ、及びまつげである。ストレスの多い環境では抜毛行為は増えるが、くつろいだりきばらしをしている状態でも抜毛が増えることもある。

診断基準－（基準の ABCE は省略）

D その障害は、他の精神疾患ではうまく説明されないし、一般的疾患（例－皮膚疾患）によるものではない

関連する特徴及び障害

抜毛は通常、他人の前ではおきない。抜毛癖ではまた、気分障害、不安障害、または精神遅滞を伴うことがある。

傷害された部位はには、正常な毛嚢と損傷を受けた毛嚢と、休止期の毛髪の増加が認められる。炎症が認められないことから、抜毛癖による脱毛症が円形脱毛症と区別される。

特有の文化、年齢、性別に関する特徴

小児の場合は男女に同じように見られる。成人では男性よりも女性に多いようだ。（以下、省略）

経過

小児期早期の一過性の抜毛は、良性の習慣と考える。発症年齢は 5-8 歳と 13 歳の二つの山がある。

症状は長く続くこともあり、または、出現したり消失したり繰り返す事がある。

鑑別診断上の留意

抜毛を否定している場合には、脱毛症の他の原因を考慮すべきである。

行動が別の精神疾患によって説明がつくのであれば、抜毛の診断は下せ

ない。

本邦では、大海ら[5]が神経症的色彩の強い中核群と、抜毛の背景に精神分裂病、精神遅滞、てんかん等が見られる周辺群に分類している。また、Cramer[6]は4歳頃までの幼児期の抜毛癖は、異常とは考えられない欲求不満の表現であろうと言っており、本邦でも一般的には、習癖として考えられ比較的簡単に治癒するという報告が多い。

最近の 抜毛癖に関する理解について述べる[7]。

①発症年齢－発症の年齢が早い5.-6歳から11-12歳という報告があり、おおむね学童期から前思春期と考えられている。

②性別－一般には女性に多いとされ、神経症的色彩の強い中核群では女性が多く、発達障害などを包含する周辺群になると男女比が小さくなると報告されている。

③性格傾向－内向的、真面目、几帳面、頑固、攻撃性を内に秘めた抑制の強い傾向を示し、心理学的検査の報告ではヒステリー傾向・強迫傾向・自己愛傾向・感情抑圧傾向等が認められるという。環境要因も関与しているが、軽度の脳波異常や発達の偏りが関与していると考えられている。

④家族の背景－特徴的な家族背景が、発症要因として最も重視されている。父親の存在感の薄さと母親や祖母の強迫的・几帳面な性格による過干渉、支配的傾向があげられている。

小片は、情緒的拒否を示す母親との基本的信頼関係に早期から障害があると述べている。Grennbergらは、母親は娘に対して友達のように振る舞ったり権威的になり、娘は母親に敵意と愛着の両価的感情を抱いているとし、hairpulling symbiosisとよんでいる。高石・十束・大海らは、過干渉、支配的、強圧的、権威的な母親からの分離不安と、攻撃的、敵対的な感情という両価的感情が存在するとしている。欧米では、精神分析学的観点から理解される事が多い。Buxhaumらは母親の象徴的代償物としてが頭髪が選ばれ、母親に対する対象愛が妨げられた結果、落ち込んだ状態と述べている。Greenbergらは、去勢不安に由来し抜毛をするのではないかという見解を示している。

⑤発症誘因－家族や家庭内の変化、学校生活に不適応等、ストレスにたいする耐性の低さがあげられている。

⑥脳波所見－星野は18例の調査[7]から、「65%が脳波異常を示し、注意欠陥・多動障害を伴うtrichotillomaniaでは6例中5例が脳波異常を示した。しかし、臨床的にてんかん発作をした例はない」と。Trichotillomaniaを対象とする脳波学的研究は少ないが、飯塚は「20例中6例に以上を認め、そのうち4例がてんかん性異常波を示し、1例がてんかん発作を示した」と報告している。星野は、二次的情緒障害を示しやすい理由として、中枢神経系の発達の未熟性に基づくストレスへの脆弱性、社会性や感情の未熟性等があげられようと、述べている。

⑦合併症－星野は前述の報告で、注意欠陥・多動障害が6例、チック・爪かみ・夜尿等の習癖以上が7例、発達性学習障害4例等を報告。大海、飯塚らも指しゃぶり、チック、夜尿症等習癖や神経症的発症があると報告。

心理社会的要因としては老松ら[8]が言うような「愛情の対象である両親（主として母親）への屈折した攻撃性や不満の身体的表現として抜毛がなされる」という事が考えられている。

中井[9]は抜毛の4つの要素を次のよう述べている。「① 攻撃性の転換－イライラした場合に毛をかきむしりたくなる。これは攻撃性等の出口を求めている感情の放出を自然に行うと安全保障が大きく損なわれるので、攻撃性の転換として起きる現象。②二次的ではあるが、エロティゼーションである。抜いている時に快感があったと述べる事もある。③緑の黒髪に象徴される女性性の否定に繋がる意味がある。④頭髪全体への加工の意識があるのではないか」と。

Tichotillomaniaの発症要因としては、星野らが述べているように心理社会的要因とともに脳の機能的・器質的異常が存在する可能性がある事も考慮に入れる必要があろう。

2　事　例

（1）事例A子（12歳 女児）筆者事例

・主訴ー髪が薄くなった。
・家族ー父38歳（技術職）、母36歳（主婦）、妹11歳
・生育歴ー周産期及び乳幼児期、特記事項なし。

＜A子の生育史、家族の状況等＞

母親の面接よりーA子は素直で育てやすかった。年子で妹が生まれ、妹は病弱で病院通い等が多かった。生活は妹中心で、母親は姉のA子 の要求や希望等を聞き入れてやることが少なかった。父親は長期出張が多く多忙。父親は合理的・論理的に物を考える人で、家庭生活や子育ては母親がするものと考えている。

A子の母親はいわゆる良妻賢母の母親に育てられた。A子の母親は実母の模範の子どもとして育ち、長じてはいかに実母のように従順で家庭人としては良妻賢母になろうと思ってきた。実父はA子の母親が12歳の時に事業に失敗し再建のために苦労する。その頃より実父は気難しく恐かった。実母は良妻賢母と言いながらも、夫が冒険をした故に事業に失敗したことを内心では非難していたようだ。

A子の母親は、A子の様子や家族や自分のことについて次のように語った。私は実母のお人形で、実母の生き方通りにしていれば失敗はないと思っていた。実母は冒険を好まず、安定した暮らしになるように、絶対に争わずにやっていく。私も自己主張をしたり冒険をすることは人生に失敗することだと思っていた。A子に対しても自分が育ったように育てれば間違いがないと思い、生活の細部にわたってしつけてきた。ある時、A子は「お母さんは、私にだけ厳しくて、妹ばかり優遇している」と言ったことがあったが、妹は病弱なので仕方がないと言い聞かせてきた。A子が妹に羨望と嫉妬を感じていたとは思わなかった。気がつくと、A子は私との距離があるというか側に寄らなくなり、いつも勉強ばかりしているようになっていた。4年の時に塾に行きたいと言ったが、妹のお稽古事と重なるのでA子の願いを退けた。5年の時に、塾には一人で行けると言うので許可した。しかし、塾からお迎えを求める電話が頻繁に掛かってきたり、送って行って欲しいと要求するようになってきた。A子が王女様みたいに命令するので私は不愉快だった。夫は勉強が大事だから塾の送迎をしてやるようにと言うので夫の意見に従った。夫は積極的に勉強を教え始めるに従い、私は娘が勉強に夢中になることを素直に喜べないところがあった。私は実母の言うとうりに短大までだったので、どこかで不満が残っていたのかもしれない。娘が勉強に夢中になると、以前にまして身辺のことや生活上の約束等が滞り、私が娘のことを叱ることが頻繁になってきた。夫は勉強が大事と娘を庇う。娘はかつては従順だったが「勉強が大事ってパパが言っているから」と、母親の言うことを無視するようになってきた。5年の終わり頃には母親の私が一日中命令をしたり指示をしていないと勉強以外のことは何もしなくなってきたり。6年の夏頃、雑誌から髪の毛がばっさり落ちてきて私はびっくりした。その時は、娘が自分で髪を切ったのかと思った。しばらくして、娘の部屋を掃除していたら 髪の毛がごっそりとでてきたが、抜けかわりの時期かと思っていた。ある時、娘の頭の地肌が見えたので、「はげたの？」と尋ねたら、黙って私をにらんでいるんです。その後、心配で病院を受診したら、「抜けてきているのではなく、抜いているのではないか？」と言われた。A子は「気がつくと抜いている」と言うので、私はショックでした。

＜事例の理解＞

A子は幼い頃より利発で親の気持ちや状況等を理解することができた。強く支配的な母親なのでA子は反抗できずにきた。また、母の守りを得なければならない年齢であっては、母の娘として従順に生きる事が自分を守る方法だったのではないだろうか。母親は自分の養育態度が支配的・指示的・過干渉であり子どもにとって問題があることに気がついていなかった。次第にA子は次第に母親に対して良き母親イメージをもてなくなってきていたと考えられる。学校では友人達と活発に過ご

している。教師からは、積極的で明るく活発な少女という印象を持たれている。６年にもなれば初潮を迎える者もおり、その身体的な変化ばかりではなく、大人に向かっていく少女達の話は豊かに騒がしくなっていくものがある。しかしＡ子の初潮はまだであり、Ａ子は家に帰えれば従順で幼い娘を要求され、友人間でも何か違和感があったようだ。母親はＡ子の服装等に流行を取り入れるというよりも、母親のイメージするお嬢様風のものを与えてきた。母親は規則正しいこと健康な生活と、何時も時計とにらっめっこをし時間で子ども達を追う。読書好きなＡ子は、懐中電灯をつけて布団の中で読書をしていた。母親に侵入されないように、隠れた読書で内的な世界を楽しんでいたようである。

Ａ子は前思春期を迎え、少女から娘への橋懸りにて、暖かくしかも自分の自立を認めて守ってくれる＜母親＞を体験できずにいると理解できよう。

面接で母親は、「またつい言ってしまいました。ママが栄養を考えて作ったのだから、残すのはお行儀も悪いし、何よりも身体に悪いわよと、娘に注意したら、娘は鋭い表情になって、＜また、抜いてやる＞と一言うんです」。そのすごみに母親は圧倒され何も言えなくなったと。母親は「こういうことが干渉的だという事なのでしょうか。私は娘に何も悪いことはしていないのに。～でも、こんな風にはっきりと反抗してきたのは初めてかもしれない～何か、恐いような、これでいいような複雑です」と。Ａ子は初めて母親に対する negative な感情を言葉で表出し始めてきた。母親は娘の反抗を戸惑いを持って受け止めつつある。

なお、この事例の来談経路は小児科と皮膚科より心因性なので心理相談を受けるように勧められたことによる。この家族は地方に在住し、近隣の相談機関に行くことに抵抗があり遠方の相談機関に来所した。Ａ子を医療機関に連れていったのは６年生の11月末で側頭部に２×5cm ほどの脱毛巣があった。

遠方故に親子並行面接は難しく、初めの３回は母子並行面接を行い、その後は母親が自分の問題が大きいとカウンセリングを求められ母親のみの相談である。

親面接が進むに従い抜毛は改善されてきているが、抜毛の治療経過は遷延化しやすく困難な事例が多いと言われているように、経過はなかなか困難であった。

次の２例は専門誌に掲載された事例で、抜毛癖を理解する上で示唆に富むので引用し考察する

（２）事例Ｂ子（14歳女子）－小野の事例[10)]

・主訴－５年生まで夜尿があり、夜尿がおさまってきたら抜毛症がでてきた。

・家族－父－39歳、母－38歳、妹12歳
近所に祖父母。家業は自営業。
一徹に仕事に精出す父親、母親は経理を担当し実務をこなすやり手。

＜生育史等＞　自営業が忙しく、祖父母に育てられる。妹は活発であるが本児はのんびりとしている。抜毛以外にも身体症状を示す。初潮は５年生。

＜治療者の理解＞－本児は抑制の強い自発性の欠如する少女。本児は４年生ぐらいまで祖父母に洋服を着せてもらい溺愛されてきたが、祖父母を慕ってはいない。母親は、いつまでも身辺の自立が上手くいかない本児に対しては指示的で干渉的であった。本児の抜毛という行為は、否定的な母親コンプレックスが本児の自発性を奪う象徴的な行為ともみることが出来るが、また自傷という形で身体（＝母なる者）への攻撃と見ることができると、述べている。

＜筆者の理解＞－この事例は、抜毛癖のセラピーの困難さを示すように３年にわたる。セラピー中に 優しさと守りを求めて複数の男性を求めていく過程もある。

思春期は、それまでの母－娘の一体の状態を破り、娘は自分の女性性を作り出していく時期である。それには、異性の侵入によって男性性を得て、客観的に時には冷徹なる目を持って母親を越えていく時ではある。これは異性との恋愛を持って越えていく青年期とは異なり、思春期では教師あるいは父親や兄弟等の影響を受けて、男性性を取り入れていくのである。しかし、身近に positive な男性像

がないと、複数の男性との交際がおきることもある。B子の場合は、父親はただ身を粉にして働く人、祖父は寵愛の対象としてB子を溺愛するのみであった。B子が母親との問題を解くにせよ、論理的・客観的に物事を考える力を得る環境ではない。

子どもは、子ども自身の自立しようとする動きと親の養育的態度との微妙なバランスとリズムの中で成長していくものであろう。しかし、とかくこのバランスは崩れやすく、どの様な親子も思春期は綱渡りの時期ではないだろうか。B子の場合は性の狂宴というものではないが、母なるものの優しさを男性のなかに求めて彷徨っていたと言えよう。

（3）事例C子（13歳女児）-平松事例[11]

・主訴－髪の毛が薄くなる

・家族－父親41歳（会社員）、母親41歳（主婦）、兄－15歳（高校生）

＜生育歴等＞　周産期及び乳幼児期には特にが問題なく手の掛からない子どもだった。勉強は普通で真面目。夜尿が6年まである。初潮は6年夏。6年の夏頃より髪が薄くなり皮膚科を受診。心因性といわれる。

父親は無口だが本児には口うるさい。母親はお人好しだが本児には過干渉。

＜治療者の理解＞

5歳の頃、親に出て行けと言われたC子は「荷物を用意して」と言う。幼少期より親子の間で心を上手く交わすことができない状況にあったようだ。初潮の記憶が母親には希薄であった。C子は素直で従順であったが、気持ちを受け止めてもらいにくく、反抗をすると時々「出て行け」と言われ、甘えも自立的心も受容されてこなかったと言えるのではないかと述べている。

＜筆者の理解＞－C子は、外では友達と活発に遊び行動的であった。小学校高学年より運動面で活躍し、指導力も開花してくる。しかし、C子は自立的言動を親に受けて入れられない体験をしてきたので、どの様に親に主張していいか分からない。親に対する無意識的抵抗・不満を、ぶつけたかったと理解できる。

A子と同様にC子も、支配的な親の元で生命の安寧をえるには、＜諍いのない従順さ＞を見せることが防衛手段であったろう。B子は、思春期になっても初潮の準備などに配慮がなされず、ある日突然初潮を迎えた驚きと不安は想像にかたくない。

女性への身体的変化を受容していくには、＜導き守り手としての母的存在＞が重要であると考える。

Ⅳ　抜毛癖における＜身体にはたらきかける行為＞の意味とは

これらの事例では、先に述べたような抜毛癖の心理社会適要因等にいくつかの共通性が認められる。

＊母親をめぐって姉妹との愛情葛藤。

＊母親が過干渉・支配性が強い。

＊親が特に母親が、子どもの気持ちや要求を十分に汲み取ることが充分でなく、心を通わす体験が少ない。

＊子どもは、安心できる環境を体験することのないままに、思春期を迎える。
子どもは存在そのものを受容される体験が少なく、身体の激変に遭遇する。

子どもは、身体の激変に遭遇し、また自立的な言動を求められる年頃になるが、その準備が充分ではない自分の身に戸惑いと不安を感じていると言えよう。

彼らが＜さわる・引っ張る＞行為の対象は頭髪である。われわれは頭髪にどの様な意味を感じているだろうか。

日本では、かつては童髪を切って元服する等、通過儀礼として髪型を変える。女は未婚の時は島田髪で、既婚者になると丸髷と髪型を変える。仏門にはいることを髪を降ろすと言う。このように、精神的成熟や社会的役割の変化を意識化するために髪に変化を与えてきた。また、心労の極みには一夜にして白髪になるとか、怒髪・逆立つ髪等に喩えられるように、苦悩や怒りの感情の象徴を髪によって語らしめてきた。

それでは、抜毛という自傷的行為を何故に行ってしまうのであろうか。

1　母性的環境の不毛

髪をもって社会的役割を意識化させてきた文化がある。だが、社会的適応の時期や通過儀礼という橋を渡る準備が充分にできていない場合が、現代では多いのではないか。準備や守りが充分でなかった場合は、髪にそれまでの怨念や怒りをぶつけるのであろうか。

身体に対する自傷的行為として（＝はたらきかけるえ）の抜毛と、髪の毛が抜けてくる円形脱毛等の身体から起きてくる脱毛とはどの様な違いや類似性があるのであろうか。身体内部からのはたらきかけについては今後の課題とする。なお、現在では円形脱毛は免疫疾患ではないかと考えられているが、子どもの円形脱毛に関して西村[12]は、母親が母性性を十分に発揮できないような環境（舅姑が実権を持っていたり、多忙のあまり親らしさを発揮したくとも発揮できないという環境）が考えられると述べている。筆者は、母親が精神疾患のために子どもの世話が充分にできず、育ての親であった父親が愛人を作り始めた思春期より円形脱毛になり回復不可能になった事例を経験している。

＜髪＞の問題は、母性的環境が不毛であった場合に生じやすいと言えないだろうか。乳幼児期早期からの母性の剥奪は、時には髪を回復不可能な状態にすることもある。子どもが怒りを出したり抵抗する対象もない状態は、不毛というよりほかはないだろう。

2　愛情葛藤と攻撃性

中井の述べる攻撃性の転換について小口らは[13]次のような解釈をしている。「学童期から中学低学年に発症する抜毛は、特に母親からの精神的圧迫に対する反発をゆがんだ形で発散しているものが多く、母親に対する攻撃性を意識している」と。 他の報告でも、養育者の干渉的態度等の環境的圧迫による挫折にともない、身体内の緊張を解放させる手段が抜毛という行為になり、母子関係における愛情葛藤が関与しているという理解が多い。

3　友達からの疎外感一親の洋服のままの子

武井[14]は、「前思春期は、同性との交友関係の獲得という発達課題があり、女性性同一性の獲得の時期にモデルである母親との未解決の問題が浮上し、母親との愛情葛藤が問題になるのではないか」と、述べている。

事例のB子は教師にとっても良い子であるが、友達関係では孤立感を持っていた。前思春期は親や教師等の社会規範に懐疑心を持ちはじめ、小さな規範破りを行い自分の規範作りをしていく時期である。子ども達は大人の反応を確かめながら親のサイズの衣類を捨て、自分で衣服を決め規範作りをしていく時期でもある。友人間では冒険と勇気が称賛され、友人との秘密の世界を作りだし、それぞれが親から離れ自分作りに没入していく時期である。親や教師の良い子では、仲間内と上手くつき合えないであろう。

事例のA子は、親や学校が決めた規則や約束事に疑問を持ち始める。集団登校に疑問をもち一人で登校したがる。母親は上級生としての責任感と規則を破ってはもってのほかという考えを強く持っている。母親は毎朝ベッドからA子の身を剥がすような戦争を続ける。大人の決めた規則に疑問を持ちはじめるA子、しかし納得のいく説明を大人は与えない。

この母親の行為は、まさにA子を引き抜くのである。この事例においては＜引き抜く行為＞が非常に象徴的に随所で行われる。

4　引っ張ること、引き抜くこと、引きづりこむこと――否定的母性

A子の母親の印象は、目の前にミルク色のベールが降りたようで不透明な感じがある。自分の眼でしっかりと外界を見たことがあるのだろうかという感じを抱く。話をする時は、両腕を身体にぴったりとくっつけ隙を見せまいと構えるようだ。母親が夫や子どもや実母・実父等を話題にする時には、これらの人物が自分の隣りにいるかのように彼女は上体を彼らから引き離し、距離をとるような仕草で話される。

母親は次のように語る。「～私は指導的な人や理性的な人には勝てないので致し方なくyesと言ってしまう。内心では反抗していたのかもしれない。父は合理的で論理的で頑張

ってないと評価してくれない。父の言うことは論理的で従わざるを得なかった。夫も父と同類の人。父や夫の言うことはごもっともだが何か気持ちの上では釈然しない。結婚以来、夫に引っ張られないようにがむしゃらに反対側に自分を引っ張って、夫に引きづられないようにしていた。結局はこの＜綱引き＞は理屈で夫が勝つので、私は気持ちが納まらなく夫との喧嘩が絶えなかった。～実母は唯一頼る人だったので、実母に引っ張れていたのには気づかずに、ひっついていたと思う。最近になって、実母にものすごい力で引っ張られていたことに気づいた。～私は娘を実母がそうであったように引っ張って支配していたんですね。それと、夫に娘をとられないようにと、自分の方に強く引っ張っていたのかもしれない。～私は、こんなマジックっていうか目眩しにあっていたことに気づかなかった。～娘は感情や気持ちをもっと分かってほしいと言いたかったのに、私は分かっているつもりになっていた。～私は娘を引きづりこむことばかりだった。～感情や感覚等自分自身が忘れていたので、直ぐには娘の気持ちなどは分からないけど」と、母親は何かに気づきはじめている。

母親は、実父や夫という男性的なものの引力に負けまいとただひたすらに反対側に綱引きをしてきた。母親は今、実母の飲み込むような・引きづりこむような母性（negative great mother) から目覚めようとしている。

娘のＡ子も、かつての母親がそうであったように母親に飲み込まれてきた。そして、読書や勉強をすることで母親からの距離を取り始めた頃に、父親が娘に勉強を教え込む。感情や感覚等とは縁の薄い父親から、論理的思考の世界へと導かれていく。

Ａ子は父の＜娘＞に逃避し、父との強い同一視の中に埋まり、女性としての identity を喪失してしまう危険にさらされていた。

Ａ子にとって論理性とか積極性（aggressive）といった男性性は、これまでの母親に対する感情や気持ち等を閉じ込めいた＜開かずの間＞をあける＜鍵＞の働きをし始めたのではないか。Ａ子は、母の望む生活を無視するかのように、身の回りの整理整頓をしないとか、母親の指示を無視する等、母親に対して批判的な目を持ち始める。そしてＡ子は６年生の頃より、髪を引き抜き始める。

Ａ子の［バウムテスト］では、太い枝が樹冠の中で立ち消えていく。また、樹冠を突き抜けていく枝もあるがそれは特に左側にある。突き抜けているその枝も、枝の先は立ち消えている。また、幹は大地に根ざすと言うより水の中に浮いているようである。

怒りのような感情が枝に表現され、何かを突き抜けたい思いがあるようだ。幹は大地にしかりと根ざしておらず危うさがある。Ａ子の母性的守りと育みの脆弱性を示していると言える。

樹木の左側に飛び出した下枝に、実った４つのリンゴが描かれる。これは、Ａ子のこれからの内的課題と成熟を象徴していると考えられる。Ａ子の怒りや攻撃的な感情はまだ抑制されているが、これらの兆しがバウムテストより伺える。

５　風穴あけ、そしてふれたい

抜毛という自傷的行為は、髪にさわるにとどまらず自分の身体に風穴をあけるかのように髪を引き抜く。

女性性の象徴として髪は考えられ、仏門に入る時には髪を降ろすことや、髪は怒りなどの感情を表現する等については前述したが、Ａ子は否定的な母性体験の中で、女性になっていくことのためらい、そして抑圧されている怒りの感情等があると理解できよう。

自傷的行為は、中井[9]の言う転換された攻撃性の意味だけであろうか。成田[15]は Selvini Palazzohli の見解を紹介し、「神経性食思不振症者は、自己の人格内部における許容し難いものを、他者ではなく自己の身体に投影することによって分裂性傾向から免れている。彼女達は自己の身体を虐待することによって、＜悪しき母親＞像と闘っている。」と、述べている。拒食症は食べないという行為で身体に何かをはたらきかけている。抜毛をしてしまう少女達も、自己の身体に投影した＜悪しき母親、negative great mother ＞と闘っている

のであろうか。

自らの毛髪を抜き、身体に風穴をあけ、何を引っぱり出したいのであろうか。何にふれたいのであろうかと考える。

日本では子どもを慰めたり励ましたりする時には、髪を撫でたり頭をさすったりする。親から身体を通して愛情・親密性を感じとる。大人になっても、髪への愛撫等は愛情と親密性を表し、いたわりやなぐさめ、そして深い感動を共有している時には、自然に頭を抱き合い髪を愛撫したり掻きむしるようにする。親密性を求めあう時には身体にふれあう。

子どもから娘に変容していく思春期に、女性のモデルである母親に対して negative な感情を持っているとしたなら、女性性を象徴する髪に対して、無意識的に反応するという解釈もできよう。

A子は母親と一緒にゆっくりと入浴をしたり、添い寝をしてもらった経験が少ない。また、A子は良い子だったが、良い子良い子と頭を撫でられたり、髪を梳いてもらったりと、やさしい愛撫をされた経験が乏しかった。A子は身体に浸透してくるような親密な愛情を感じる事が希薄だったといえる。

身体に染み込んでくるような親密な愛情の入口（風穴）作りを、抜毛という行為によってなし、風穴をあけるという意味があるのではないかと筆者は理解する。

抜毛によって風穴をあけ、どのようにしたら親密な愛情と出会えるか、その知恵を探す旅の入り口にいるとも言える。だが、困難な旅である。抜毛癖は早期からの母性的体験の喪失をしているものも少なくはなく、治療が長期に渡り困難な場合がある。

V　自己から疎外された身体とは

1　自己から疎外された身体

抜毛癖の事例から自傷的行為をする意味について考察してきた。攻撃性、性的同一性の否定、親密性を求める入り口作りの意味を持って、自らの身体に風穴をあけようとしているのではないかと筆者は考えている。ここで再度、何故に身体に自傷的行為を行うのかを考察する。

成田[15]は、身体と自己について次のように論じている。

「～移植腎は免疫学的には非自己であり続けるが、～自己の身体の機能を果たすという意味において自己の一部になる～それに伴って心理的にも移植腎を自己の身体像に統合していく過程が生じる～患者は移植腎を大切な預かりもの・お客様と表現し、絶えず腎臓に注意を向け、その部位に手を当てふれている。順調になってくると、次第に手でふれることを少なくなる」と観察し、「自己ならざる移植腎が自己に統合されてくると、もはや意識される対象でなくなるようである。～そして、心気症者のやめる部位へのとらわれや摂食障害者の身体への態度を見ると、このような患者は腎移植患者のように、やめる身体の部位をあたかも外部の対象のごとく扱う。やめる身体の部位はあたかも自己ならざるものとして扱われる。」と。また、「心身症者においては、その内部世界（自己）の一部が外部化（非自己化）しつつあるのでないか。」と述べている。筆者も、摂食障害のクライエントが「満腹？おなかがいっぱい、そんな感じってあるんですか？」「おなかが空く？そんな感じありませんよ～感じとか言われてもわかんない。」と語ることが多く、身体から感覚が疎外され、身体を暖かさや親密性をもって感じるという事が少ないように経験している。

心身症おいても身体に対する自傷的ともいえる行為においても、身体から感覚が疎外されているのではないかという共通項があるのではないだろうか。

Ammon[16]は、「心身症者は、自己の身体にたいし No という」と。また Selnini－Palazzohliha[15]は、「神経性食思不振症者においては自己の身体に対する体験は曖昧で両義的であり、それは non-me, と bad-me の間に属している」と述べている。つまり、心身症者にとって身体は非自己化しつつあるのではないかという意味であろう。心身の疎外状態が著しいのは、心身症ばかりではなく精神的疾患や自閉症においても多く経験されていることである。

自己から身体が疎外されている（非自己化）状態とは、身体内が五感も含めて未分化・不分明の状態であり、身体内部に暖かさ・安心感等の感覚の特徴を失っている。身体の実在があっても、身体に対する親密性を喪失し、身体は自己から外部のものへと変化していると考えられる。

Hillmann[17]は、心身症について次のように述べている。「意識が、精神及び自我との同一視から離れ、その受容性と自己親密性において、より広く、より女性的になるにつれて、肉体もまた身体意識に変容するのである。身体意識は、肉体の内的経験つまり、暖かさと喜びと安らぎと律動と、今ここに存在しているという私たちの人間性の実際的な受肉、そして、身体的に自分自身と、私たちの症候と感覚と、そして他の人々の身体的存在と身近にいるという内的経験に始まる」と。

身体の一部が非自己化している、疎外されている状態とは、感覚やあたたかさや親密性が失われていることであり、それはとりもなおさず自己の中の女性的なるものが生き生きと生かされていないことであろう。女性的なるものが生かされていない時には、肉体は病み、自己の中の身体性がなくなり疎外されている状態にあると理解される。

2　自己から疎外された身体の回復とは

（1）分割された三つの世界

心身が分割した状態について箱庭で考察する。

A子の初期の箱庭－右上に世話をされる家畜の世界が身体として表され、左下には、変容の象徴である蛙や水鳥達がおり、静かな心の世界がある。そして真ん中は、毒茸の家や眠り猫や巨人のいる森であり、変容のための第三の世界が作られている。

B子の初期の箱庭でも、右側に教室の風景がある。このような 学びの場をセラピストの小野は精神の世界と理解している。左側では料理を作っており母の世話を受ける身体の世界、真ん中はブランコや滑り台などがあるが誰もいない。ウサギが道具の掃除をしている。筆者は、ブランコは天と地の間にあって、揺れながら中間的な世界を浮遊し日常的な世界から離れ、他の角度から世界を観察し体験できるものであると考える。また、遊園地や公園は現実的な世界とは異なり心を遊ばせることによって、自由に様々な世界とコンタクトし、そして何かを生み出す第三の世界とも考えられる。ウサギは女性性の象徴として考えられる。この遊びの場は、B子にとっての第三の場、変容の場になるのではないだろうか。河野博臣はこのような第三の世界を＜魂の領域＞と言っている。これらの三つの世界はまだ柵で整然と分られれている。

このように、抜毛をする子ども達の心身も分離し疎外されていると考えられよう。

成田[15]は、自傷行為として典型的なリストカットを取り上げ、「彼らは手首を切る瞬間は無感動で、なにかものを切るように切る。手首は外部対象化されているように見える。～切り口から血が流れ出るのを見ると～本来の自分が取り戻せたような気持ちになるらしい。手首に代表される身体が本来の自己と感じられておらず、むしろそれを傷付け破ることによって自己が回復されるようである」と述べている。抜毛例では、上手く抜くとその瞬間の緊張を快に感じるという人もいる。

抜毛をするのは周囲の喧噪な世界から逃れ、唯一自分の世界に籠もることができる時なのかもしれない。風を通す前の静かな空間にいるとも考えられる。そして、風穴をあける瞬間に自己の存在を感じているともいえないだろうか。

心身症や自傷的行為には、心身の分割あるいは身体の非自己化という＜自己からの心身の疎外状態＞に対して、＜身体に風穴をあけ、自己とのふれあいを求め、自己が回復されることの希求＞があるとしたら、身体に自傷的に関わるは意味は深い。

A子もB子も、第三の世界をイメージし、自己の変容の過程を内的課題としているならば、まさに自己疎外状況は止揚されていくのではないだろうか。

（2）自傷的行為による風穴あけ－自他とのふれあい

Freudは、自己破壊を死の本能や他者に向うべき攻撃性の内向と説明した。分析心理学の

Hillmann[18]は自殺衝動のなかには、人格変容への衝動があるともという。Klopfer[19]は「死は自己との結合を失った自我の死を意味する。この場合自我は母の子宮に、新たな生命の意味を持って新生しなければならない」という。自己破壊的行為には、変容や、新たな生命の再生等、＜自己を求める衝動＞が内在されていると理解される。

それでは、自己破壊的な自傷行為によって何を求めようとしているのであろうか。

河合[20]は「シンナーを吸引している少年達は、観音様の幻覚を見、何とも言えぬ仲間同士の一体感に陶酔している」と述べている。彼らはコミュニケーションを求めているが、通常の状態では関係が作れなくなり、身体に破壊的行為を与え、幻覚の中で他者との一体感に陶酔し、他者との繋がりを満足させたいのではないだろうか。 破壊的行為により、＜他者との一体感＞を求めていると言えよう。

髪に問題を示す子どもの箱庭では、繋がりの切れた鉄道や道が示される事が多い。新しい道を模索しながらもその入り口や目的地が見えてこない困難さと焦りを感じさせられることがある[11)21)22)]。また、全体性というのか統合された状態を表すかのように、曼陀羅の世界とでも言うべき大陸や花園を作ることがある。しかし、その全体を見ると何かが抜けていたり欠けていることがあり、なかなか完全な円冠になりにくい[23)]。セラピーが進展していくに従い繋がりが出てくるようになる。

自傷的行為には、＜他者とのふれあいや繋がりを求めている＞意味合いが潜んでいると言えよう。

円冠に象徴されるように自己の身体と精神が繋がりをもってくると、箱庭では、外界に向けられた線路や、花冠や出立の光景が作られていく。[11)12)22)23)]

それでは、ふれあいや繋がりを求めていくていく意味とは何であろうか。Winnicott[24]は、本当の自己は存在（being）であり、偽りの自己は反応（reaction）であると述べている。本当の自己は存在を経験させるが、偽りの自己はその存在の経験を中断させる。本当の自己が生きられないように防衛し続けるならば、＜自己の存在を求めて、偽りの自己を切り開き、本当の自己探しを求めるであろう＞と述べている。

Winnicott的に理解をするならば、自己破壊的な自傷的行為は、＜本当の自己探し＞という表現になろう。

李[25]は自己破壊的行為の意味について、「言葉と身体が、ともに本当の自己を表現する手段にならず、しかし本当の自己を伝えようする衝動が突き上げてきて内的緊張が高まるとき、性急な行動化として自己破壊的行為が生じる。自己破壊は、偽りの自己という殻を破壊し、本当の自己を伝えるために生じるのである」と、述べている。偽りの自己の＜殻破りとしての身体破壊＞論を述べている。

李の言及は自己開示や本当の自己探しにとどまらない。李は「言葉で自己主張することができず、～自己破壊的症状に訴えるしかない。～他者の前で本当の自己でありたいという切実な要求が隠されている。～殻破りは他者による受けとめがあって初めて自己開示の流れがある」と、述べている。李は彼らが受け止め手を求めており、切実な要求があることを強調している。

自傷的行為とは、自己に風穴をあけ内的な自己とのふれあい、そして他者とのふれあいをもとめ、自己が存在していることを受け止めたい行為と理解できよう。

人は自己に出会い、その自己と他者によって包まれるような（contain）体験があること。そして、人は自己と他者によって持続的（coninue）に受容（acceptance）されることを望んでいるのではないだろうか。

Ⅵ　まとめ

筆者は、抜毛癖における自傷的行為の意味について検討した。自傷的行為には、心身の疎外状態を統合すべく、身体に風穴をあけ次のような自己変容を求める意味があるのではないかと考える。

1 否定的な母性に対する怒りなどの感情や、攻撃性の転換

2 性的同一性の受容に対するためらいや否

定の葛藤
3 親密性・愛情などふれあいを求めての風穴あけ
4 他者の変容と自己変容を求める風穴あけ
5 自己の存在性＜精神性－魂＞に開かれていく風穴あけ

抜毛と言う行為によって、意識的あるいは無意識的にであれ、自己とのふれあい、そして自己と他者とのふれあいを希求し、風穴あけをしていると考える。自己の内的世界から他者の内的世界に通じていくと言うように、風のように自由に渡ることの可能性を求めていると言えよう。

抜毛をする人達がふれたいものは、他者の親密性や、自己の中で感情や感覚が統合されることだけなのであろうか。A子やB子の箱庭に見られたように、彼女たちの無意識は、外界から与えられることばかりを望むのではなくして、心の内界で何者かの介在と守りによって得られる深い精神性との出会いを求めているのではないだろうかと考える。

この風穴は、外界と内界の通気口の意味ばかりではなく、より深く内界に降りる入り口の意味もあると考える。

Hillmannは、「～拒絶された身体的自己から、新しい身体が生まれ、次に王たちがやってきて贈り物をもたらすのである。」と、述べている。

A子の小びと達の宝探し、B子のウサギの掃除のあとに何がもたらされるのか、C子の場合は、はじめ真ん中は赤ん坊が一人寝かされており後半にやさしい老賢人が現れ、赤ん坊一人っきりの領域は花園になる。

Hillmannは、「身体への接近は、夢への接近に似ている。両者とも、内的繋がりを発達させ、心的現実を広げる道を提供する。～この身体の中にもぐり込み、内側からそれに耳を傾けることによって、身体と密接になり、よく知りあうこと～」が大切であることを述べ、さらに「～肉体的なものがおとしめられるときはいつでもでも、女性的側面に敵対して何事かがなされている。～受肉は、肉体における生命の感情なのである。」と。

自傷的行為はまさに、自己の身体が＜身を挺して＞、内なる女性性とのふれあいの重要性を訴えかけてくるものであると考える。

自己から身体が疎外されているのは、女性性の問題ではないかということに関しては、今後の課題とする。

おわりに

＜手にふれたら冷たかった＞＜葉っぱにさわったらすべすべしていた＞というように、ふれるという言葉は、客体の持つ特徴などが、主体者の主観で把握され、客体と主体との間に距離がないと言うか、どこからどこまでが主体なのか客体なのか判明しにくい。五感の中でも触覚は、特に外界と直接に接っしているところで、主体と客体を分ける部位の感覚である。それが主体と客体が移入し合うように経験される事は興味深く、また、分割が困難な反応を示す事が面白い。

抜毛をしてしまう娘達が、母子一体感といった融合の体験やふれてもらった経験が少ないとしたら、彼女達は安全と安定と心地よさというものを、自己の内に取り入れることが難しいと思う。あまりにも長くふれられずに放置されているとしたら、内部から声をだすこと難しいであろう。抜毛行為として外側から引っ張ってやらねばならないだろう。

A子の母が、「髪をとかしてやったことがなかった。～ある日、目だたたなく結ってあげられる方法に気づきました～」と、娘に一歩近づけたと語っていた。また、「親は親の年齢を重ねなければと思いました。娘からバチバチって、目を覚ましてって叫ばれたように思います。」と。A子の母親自身がその内部に若く自由で積極的な少女を取り戻すことができることを祈っている。

女性は自己の＜少女＞の部分を育て直す、あるいは強めることで、娘を癒して全体性へと戻すことの可能性が広がると考える。

母親も娘も思春期を乗り越える旅にいると言えよう。

<付記>
本論文をまとめるにあたり、愛知教育大学の西村洲衛男教授にご指導を頂き、また、金沢大学医学部保健学科精神看護学の五十嵐透子講師より貴重なご意見をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

<引用及び参考文献>

1) 河合隼雄他：「トポスの知」:188-195, 1993, T BSブリタニカ
2) 坂部恵：『「ふれる」ことの哲学ー認証的世界とその根底ー』, 1983, 岩波書店
3) 加藤正明他：精神医学事典), 1985, 弘文堂
4) 高橋三郎他訳：「ＤＳＭ－Ⅳ－精神疾患の診断・統計マニュアル」, 1996, 医学書院
5) 大海作夫他：「Trichotillomaniaの心身医学的研究, 精神身体医学, 13 : 379 ,1973
6)Cramer,J.B.:Common neuroses of childhood, Arieti,S.(ed):American Handbook of Psychiatry, New York,Basic Books,1959
7) 星野仁彦他：「トリコチロマニア（抜毛癖）の発症要因に関する一考察」, 児童青年精神医学とその近接領域, 34-3:1-13, 1993
8)老松克博・山中康裕編：「子どもの心身症」, 178-189,1988, 東山書房
9) 中井久夫：「Trichotillomania（抜毛症）, acting out」小野論文へのコメント, 箱庭療法研究３：162-164, 1988, 誠信心書房
10) 小野従道「Trichotillomania（抜毛症）, acting out」, 箱庭療法研究３：140-158, 1988, 誠信心書房
11) 平松芳樹：「トリコチロマニア（抜毛癖の発症した13歳少女の箱庭療法過程」, 箱庭療法学研究, 19-2:25-34, 1996
12) 西村洲衛男：第10回日本箱庭療法学会, 「砂を寝かしておくことによって変容したもの」発表におけるコメント, 1996/11/20
13) 小口徹他：「トリコチロマニアの治療」, 精神神経学雑誌, 83:621-622,1981
14) 武井明他：「11歳女児のトリコチロマニの治療経過について」, 児童青年精神医学とその近接領域, 34-2: 164-171,1993
15) 成田善弘：「心と身体の精神療法」, 13-23,1996, 金剛出版
16)Ammon, G.,a 青木宏之訳：「精神分析と心身医学」, 岩崎学術出版社, 1979
17)Hillman,J., 樋口和彦他訳：「内的世界への探求」, 168-172, 1990, 創元社
18)Hillman,J., 樋口和彦他訳：「自殺と魂」77-80,1982, 創元社
19)Klopfer,B., 大原健士郎他訳：「自殺ーユングの立場から孤独な魂の叫び, 247-262, 誠信書房
20) 河合隼雄：「母性社会日本の病理」, 中央公論社, 1976
21) 谷口文章：「円形脱毛症の箱庭療法過程」, 箱庭療法学研究, 3-2 : 31-43, 1990
22) 伊東和子：「抜毛癖を呈した８歳女児の箱庭療法過程」, 箱庭療法学研究, 9-2: 59-68, 1996
23) 山家結花：「砂を寝かしておくことによって変容したもの」発表, 第10回日本箱庭療法学会, 1996/11/20
24)Winnicott,D.W. 牛島定信訳：「情緒発達の神分析理論」, 岩崎学術出版社, 1977
25) 李敏子：「他者へのメッセージとしての自己破壊」, 心理臨床学研究, 6-2:19-28, 1989
26)Zwig,C., 川戸圓訳：「女性の誕生」, 1996, 山王出版